

スポーツに必要なグループ・コミュニケーション能力

～トップアスリート発掘・育成事業における
コミュニケーション能力育成プログラムに着目して～

佐藤由佳 栗木一博

キーワード：グローバルスポーツ教育プログラム
タレント発掘育成事業 グループワーク

Necessary communication skills
-differences in methods and skills in interpersonal communication between
subjects with and without athlete development programs-

Yuka Sato Kazuhiro Awaki

Abstract

Except for the subject of health and physical education, in the athlete training scene, programs to foster communication skills is not much. Currently, Japan has been performed talent excavation training business. In addition, in some areas, in order to foster the human nature of the non-competitive ability, global sports education program (GSEP) has been addressed as a program to develop and nurture the intellectual ability.

In this study, we demonstrate the ability to communicate and structure required in sport. In addition, we focus on the GSEP, to clarify the difference between the evaluation of communication skills with group work in experienced and non-experienced of GSEP. Survey was conducted a questionnaire survey to freshman 353 people and sophomore 347 people university belonging to the physical education department to attend physical education university. The group work was carried out to target the GSEP experienced seven and non-experienced eight, were taken the situation.

From the results of the questionnaire survey, 10 factors that may be required in the sport has been extracted. As relevance of the extracted factors, it was possible to derive a factor given a factor affecting the other factors. In comparison of GSEP experienced and non-experienced, compared GSEP experience is a non-experienced, and became a result of ability to think is excellent.

I. はじめに

スポーツ基本計画における我が国の政策目標では、夏季・冬季オリンピック競技大会それぞれにおける過去最多を超えるメダル数の獲得、オリンピック競技大会及び各世界選手権大会における過去最多を超える入賞者数の実現を図るとし、オリンピック競技大会の金メダル獲得ランキングは、夏季大会では5位以上、冬季大会では10位以上をそれぞれ目標に掲げている。これらの目標を達成するためには、オリンピックに照準を合わせたターゲットエイジ（16～20歳）の発掘・育成が重要である。スポーツ選手は「心・技・体」の3つの能力だけではなく、競技に対する意識やコミュニケーション能力などの人間性が競技パフォーマンス以上に問われることが多い。

スポーツは人と人との関わり合いが多く、発言や表現法も多岐にわたることから、コミュニケーション能力育成の場に活用できる。さらに、コミュニケーション能力はチームスポーツの中で常に意識する能力であり、その向上はチームへ一体感をもたらし、円滑な人間関係は競技力向上に寄与するものである。

II. 研究目的

以下、3つを明らかにすることを研究目的とする。

1. スポーツに必要とされるコミュニケーション能力の構造

体育系大学に通う大学生を対象にアンケート調査を実施し、スポーツに必要と思われるコミュニケーション能力の因子を因子分析にて抽出する。そこから、スポーツに必要とされるコミュニケーション能力を明らかにする。

2. 因子分析で抽出されたコミュニケーション能力の関連性

本研究で用いたグループワーク内で発揮

されると思われるコミュニケーション能力の関連性を明らかとするため、1)で抽出された因子をもとに作成したアンケート調査を体育系大学に通う大学生を対象に実施し、各コミュニケーション能力の関連性をDematel法による重要度分析にて明らかにする。

3. ゲームによるコミュニケーション能力の評価

1で明らかとなったコミュニケーション能力の因子をもとにグループワーク中の発話を分析する。そこから、グループワークの課題を簡潔にクリアするための能力や、グローバルスポーツ教育プログラム（以下GSEPと略記する）が被験者のコミュニケーション能力にどのような影響を与えているのかを明らかにする。さらに、日頃から被験者の指導を行っている指導者へ被験者に対するコミュニケーション能力の評価を依頼し、ゲームによるコミュニケーション能力評価との差を明らかにする。

III. 研究方法

1. アンケート調査

1-1. スポーツにおけるコミュニケーション能力の構造

スポーツにおけるコミュニケーション能力の構造を明らかにするため、高校までにスポーツ経験のあるS大学に通う体育学部1年生353名にアンケート調査を行った。アンケートは、「自分の感情をうまくコントロールする」「自分の考えを言葉でうまく表現する」「相手の考えを発言から正しく読み取る」等、藤本・大坊（2007）が定めたコミュニケーションスキル尺度ENDCOREsに、「チームメイトとは誰でも話す」「誰でも気軽に話をする事ができる」等、様々なメディアやアスリートの発言等からスポーツに必要と思われる能力を組み合わせた40項目の質問から構成され、「とても重要」

「重要」「どちらともいえない」「あまり重要ではない」「重要ではない」の中から1つ選択をしてもらう5件法にて回答を求めた。この調査結果を、SPSSの因子分析にてスポーツ選手に必要なコミュニケーション能力の因子を抽出した。

1-2. コミュニケーション能力の因子の関連性

前項の分析によって導き出された因子をもとに、「自分の考えていることをうまく表現する」「相手に受け入れてもらうために意見を主張する」「相手が伝えたいことを正しく読み取る」「相手を尊重して意見を理解する」等10項目からなる二者択一法にて、アンケート調査を実施した。アンケートは、10項目それぞれを一对比較した40項目の質問で構成され、どちらの能力がより重要かとして二者択一法で回答を求めた。この調査結果は、Dematel法による重要度分析にて、グループワークに必要と思われるコミュニケーションスキルの関連性を明らかにした。

2. 映像分析

2-1. 撮影・分析方法

グループワークに取り組んでいる様子

表1 発話カテゴリー

メインカテゴリー	サブカテゴリー
リーダーシップ	話し合いの中で司会的な役割をする 話の中で段取りを決める
对人的判断力	相手の改善すべき点を指摘して直させる 複数の案がある場合に決定を下す 周りの意見を聞いて正しいと思われるものを選別する 意見の食い違いに対処する
受動的発想力	周りの意見を聞いた上で新しい意見を導き出す 相手の意見を理解し新しい考え方を提示する
論理的問題提示	理由付けをした上で問題提示をする 周りの意見を聞いた上で問題の所存を提示する 相手の意見を聞いて分からなかったことを聞き返す
友好的表現力	相手に伝わらなかったことを分かりやすく言い換える 笑いや怒りなどの感情表現を表す発言
対外的他者受容	相手の意見に共感する 友好的な態度で接する 相手の意見を尊重する
能動的読解力	相手の意見を発言から読み取る 相手の感情を発言から読み取る
自己統制	周りの期待に応じた発言をする 相手の行動や発言を聞いて自分の意見を抑制する 自分の感情をコントロールする
関係調整	人間関係を良好な状態に維持するように心がける 感情的な対立による不和に対処する 意見の対立による不和に対処する
自己主張	自分の主張を論理的に道筋立てて主張する 周りとは関係なく自分の意見を述べる 会話の主導権を握って話を進める

を、1グループにつき1台のビデオカメラで全員の顔と口の動きが分かるよう、ビデオカメラを下から見上げるように設定し撮影をした。撮影した映像をもとに、グループワーク中の発話をすべて文章化した。そこから、因子分析で明らかとなった因子をもとに発話内容を定めた発話カテゴリー（表1参照）をもとに文章化した発言を分類し、グループワークをクリアするために必要能力の分析を行った。

2-2. グループワークを簡潔にクリアする為の発話

東京都タレント発掘育成事業（以下 TID と略記する）事業に参加している中学2年生（以下、東京都 TID 事業参加）7名に簡単なゲームを用いたグループワークを実施した。さらに、比較対象とするため、宮城県教員免許取得者7名にグループワークを実施し、このゲームを簡潔にクリアするために必要なコミュニケーション能力を明らかにする。被験者は、小学生よりも、発言力や読み取る能力に長けていると思われる中学生と、中学生よりも相手の発言を読み取る力、自分の意見を相手に伝える力に長けていると思われる教員免許取得者を比較することにより、能力の差が明らかになると思われるため選定した。

調査時期においては、東京都 TID 参加者へのグループワーク実施は平成25年6月下旬、教員免許取得者への実施は平成25年8月中旬である。

2-3. GSEP 経験者と GSEP 未経験におけるコミュニケーション能力の比較

和歌山県 TID 事業に参加しており GSEP のプログラムを経験している小学5年生7名（調査時期：平成26年7月下旬）と TID 事業に参加しておらず、GSEP 未経験の S 大学柔道塾の塾生、小学5年生5名・6年生3名からなる8名（調査時期：平成26年10月中旬）を比較対象に、グループワーク

を実施した。また、両被験者の指導者に対して、子どもたちのコミュニケーション能力の評価を依頼した。

IV. 結果

1. アンケート調査の結果

1-1. スポーツに必要なコミュニケーションの構造

スポーツにおけるコミュニケーション能力の構造を明らかにするために、40 項目の質問紙の解答から、因子分析を行い、その結果は因子負荷量 0.4 以上の項目を因子ごとに表 2 に示した。第一因子には、リーダーに備わっている要素を含むことから「リーダーシップ」と命名した。第二因子には、人と関わり合う中での判断力の要素を含むことから「対人的判断力」と命名した。第三因子には、受動的要素と発想的要素を含むことから「受動的発想力」と命名した。第四因子には、問題提示と発言の要素を含むことから「論理的問題提示」と命名した。第五因子には、表現力と友好的な要素を含むことから「友好的表現力」と命名した。第六因子には、他者を尊重する要素と人間関係のトラ

ブルに対処する要素を含むことから「対人的他者受容」と命名した。第七因子には、自分から発信する能力と読み取る力の要素を含むことから「能動的解読力」と命名した。第八因子には、自己統制の要素を含むことから、「自己統制」と命名した。第九因子には、人間関係を調整する要素を含むことから、「関係調整」と命名した。第十因子には自己主張の要素を含むことから、「自己主張」と命名した。

1-2. Dematel 法による重要度分析

コミュニケーションの構造分析によって得られた 10 因子に対して、各被験者が一対比較を行い、それを Dematel 法によって分析した。Dematel 法とは因子間の関連性の強度をグラフ化したものである。縦軸は「原因」と「結果」を表現しており、グラフの上部に位置付けられた因子が他の因子に対して影響を与えていることを表現している。また、横軸は「単純」「複雑」を表現する軸となっており、右側に位置付けられた因子は他の因子からの影響を多く受けているものであることが表現されている。分析の結果、対人的判断力が他の因子に多くの影響を与えており、友好的表現力が他の因子から多くの影響を受けている因子であるという結果となった。(図 1 参照)

表2 スポーツにおけるコミュニケーション能力10因子

	成分									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
だれとも気軽に話せることができる	.680									
会話の主導権を握って話を進める	.670									
多くの意見をまとめる為に話をする	.670									
なにごとにも先陣に立って行動する	.660									
周りの期待に応じ難い	.659									
周りは関係なく自分の意見や立場を明らかにする	.469									
チームメイトとは話でも話す	.459									
相手の感情や心理状態を敏感に感じ取る		.805								
意思の食い違いに適切に対応する		.893								
課題を解決するために正しい判断ができる	.434	.657								
何か伝えたいことがあるときにコミュニケーションをする		.477				.441				
定期的なコミュニケーションをする			.719							
相手の意見をできる限り受け入れる			.708							
相手の発言から新しい考えを導き出すことができる			.694							
納得させるために相手に柔軟に対応して話を進める			.531							
相手の目を見て話を聞く			.423							
相手に明白に課題を提示することができる				.361						
問題以外にも建設的仲立ちコミュニケーションをとる				.834						
試合の勝ちはコミュニケーションをとる				.804						
よく考えてから言葉を使う				.577				.440		
伝える内容によって表情を変える					.721					
自分の気持ちを表情でうまく表現する					.702					
友好的な態度で相手に接する					.574					
人間関係を良好な状態に維持することを目指す					.512					
試合の前コミュニケーションをする						.711				
言葉の利便に基いて正しい判断をする				.408		.853				
感情的な対立による不和に耐える						.486				
相手の立場や意見を尊重する						.446				
相手の意見をよく聞く				.406		.409				
自分の考えを言葉でうまく表現する						.691				
相手の考えを言葉から正しく読み取る						.659				
自分の感情をうまくコントロールする							.802			
人間関係を第一に考えて行動する					.516		.592			
人間関係を良好な状態に維持するよう心がける								.763		
相手の意見や立場に共感する								.723		
伝える内容によって声色を変える									.866	
自分の主張を論理的に裏打ちして説明する										.813

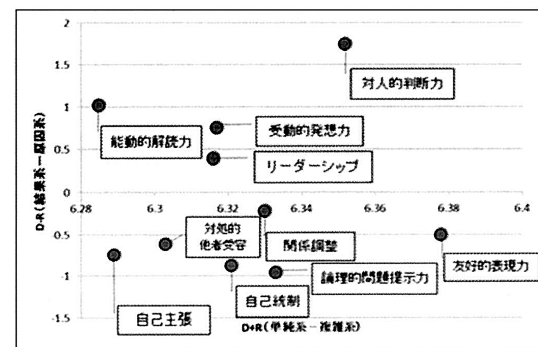


図1 重要度分析

2. 映像分析の結果

2-1. グループワークを解決するために必要なコミュニケーション能力

(1) クリアタイムと発話数

東京都 TID 事業参加者 7 名と教員免許取得者 7 名を比較対象に制限時間を 20 分と設定し、簡単なゲーム (9 人の食卓) を用いたグループワークを実施した。東京都 TID 参加者は制限時間内にグループワークをクリアすることができず、20 分間における発話数は 285 だった。教員免許取得者は 8 分 41 秒でグループワークをクリアし、クリアまでの発話数は 216 だった。(被験者のクリアタイムと総発言数を表 3、4 に示す)

表3 発話数とタイム		表4 発話数とタイム	
東京都TID参加者		教員免許状取得者	
人数	7	人数	7
発話数	285	発話数	216
クリアタイム	なし	クリアタイム	8分41秒

(2) グループ内における発話の分配

被験者の比率と全員が均等に発話したと仮定した均等分配線と被験者の比率と実際の発話の分配線との関係をローレンツ曲線にて表した。(図 2、3 参照) 均等分配線と分配線との面積をジニ係数と呼び、この面積

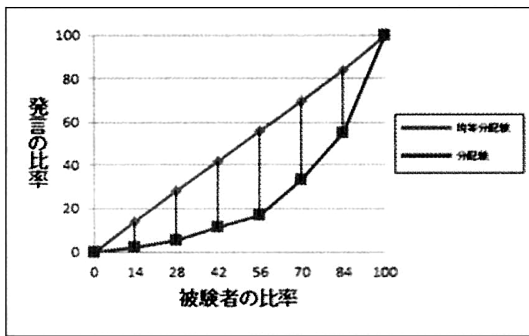


図2 発話の分配 (東京都TID参加者)

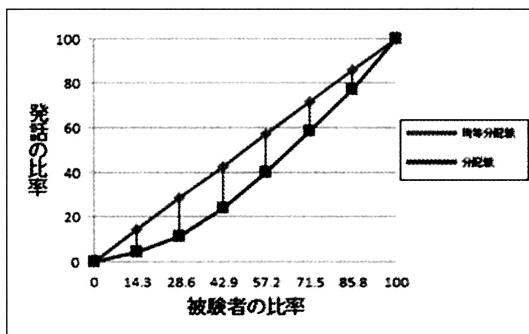


図3 発話の分配 (教員免許状取得者)

が大きければ大きいほど、グループ内の被験者の発話数に差が生じていることを示している。東京都 TID 参加者のジニ係数は、10.05 であり、教員免許取得者のジニ係数は 3.51 であった。(ともに少数第二位以下切り捨て)

(3) グループワーク中に発揮されている能力

東京都 TID 参加者と教員免許取得者の各被験グループの全ての発話を 100% としたときの、発話スキル (表 3 発話分布尺度参照) が占める割合を導き出し、ゲームに活用されている能力の比較を行った。東京都 TID 参加者 (図 4 参照) は、論理的問題提示が最も多い割合を示し 21%、次いで自己統制 14%、能動的読解力 12%、リーダーシップ 10%、受動的発想力 10%、友好的表現力 10%、自己主張 9%、対処的他人受容 7%、対人的判断力 5%、関係調整 2%、であった。

教員免許取得者は、論理的問題提示が最も多い割合を示し 18%、次いで自己主張

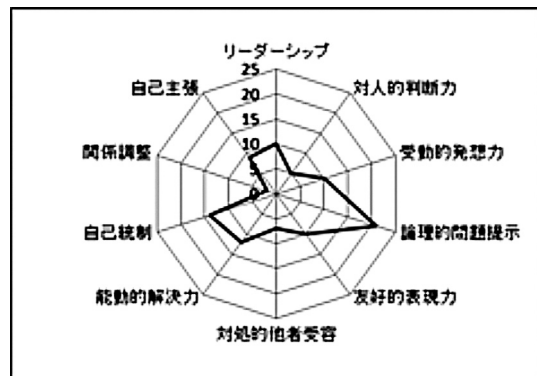


図4 スキル割合 (東京都TID参加者)

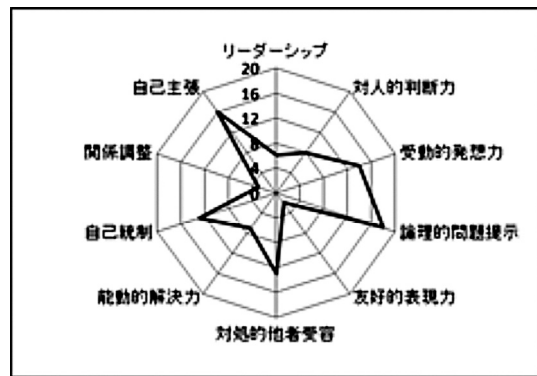


図5 スキル割合 (教員免許取得者)

が16%、受動的発想力14%、対処的他者受容13%、自己統制13%、対人的判断力8%、能動的解読力7%、リーダーシップ6%、関係調整3%、友好的表現力2%であった。

(4) 発話カテゴリーにおいて個人が占める割合

発話カテゴリー別に、カテゴリー内の発話を100%とし、カテゴリー内における各被験者が占める割合（カテゴリー別被験者発話割合）を表5、6に示した。

東京都 TID 参加者（表7参照）のカテゴリー別被験者発話割合をみる。リーダーシップでは被験者 TS6 が80%、対人的判断力では被験者 TS1 が43%、受動的発想力では被験者 TS6 が64%、論理的問題提示では被験者 TS6 が47%、友好的表現力では被験者 TS6 が25%、対処的他者受容では被験者 TS6 が被験者53%、能動的解読力では被験者 TS6 が58%、自己統制では被験者 TS3 が31%、関係調整では被験者 TS7 が57%、自己主張では TS6 が56%を示し各カテ

表5 カテゴリー別被験者発話割合（東京都TID参加者）

メインカテゴリー	TS1	TS2	TS3	TS4	TS5	TS6	TS7
リーダーシップ	10	0	0	0	0	80	10
対人的判断力	43	0	0	0	14	29	14
受動的発想力	18	0	0	0	6	64	12
論理的問題提示	9	0	0	2	5	47	37
友好的表現力	18	10	11	11	11	25	14
対処的他者受容	5	0	0	0	10	53	32
能動的解読力	9	0	0	3	3	58	27
自己統制	26	15	31	5	3	10	10
関係調整	29	0	0	0	0	14	57
自己主張	12	0	8	0	4	56	20

表6 カテゴリー別被験者発話割合（教員免許状取得者）

メインカテゴリー	MS1	MS2	MS3	MS4	MS5	MS6	MS7
リーダーシップ	7	14	0	7	29	43	0
対人的判断力	12	12	0	0	23	24	29
受動的発想力	23	7	0	20	23	14	13
論理的問題提示	8	26	5	3	21	16	21
友好的表現力	20	20	0	0	20	20	20
対処的他者受容	15	11	4	7	26	15	22
能動的解読力	6	12	0	13	25	25	19
自己統制	22	7	7	11	18	21	14
関係調整	0	0	0	0	29	14	57
自己主張	29	12	12	0	23	12	12

リーの中で最も高い割合を示した。

2-2. GSEP 経験者と未経験者の比較

(1) クリアタイムと発話数

和歌山県 TID 事業に参加している小学5年生（以下、和歌山県 TID 参加者）7名と宮城県 S 大学柔道塾に通っている小学5年生4名・6年生3名（以下、柔道塾塾生）からなる8名を比較対象に制限時間を40分と設定し、簡単なゲーム（9人の食卓）を用いたグループワークを実施した。

和歌山県 TID 参加者は制限時間内にグループワークをクリアすることができ、クリアタイムは36分55秒でクリアまでの発話数は1004であった。柔道塾塾生は制限時間内にクリアすることができず、制限時間の40分間における発話数は1096であった。（被験者のクリアタイムと総発言数を表7、8に示す）グループワーク内におけるコミュニケーション能力と指導者からの評価の関連性を明らかにするため、分析対象に対象人数と発話数は設定していない。

表7 発話数とタイム

和歌山県TID参加者	
人数	7
発話数	1004
クリアタイム	36分55秒

表8 発話数とタイム

柔道塾塾生	
人数	8
発話数	1096
クリアタイム	なし

(2) グループワーク内で発揮されているコミュニケーション能力

グループ内で発揮されているコミュニケーション能力を、グループワーク中の発話をもとに発話カテゴリー（表1参照）にて分類した。全ての発話を100%としたときの、発話カテゴリーにおけるメインカテゴリーが占める割合を明らかにした。

和歌山県 TID 参加者（図6参照）は、自己主張が最も多い割合を占め29%、次いで論理的問題提示14%、リーダーシップ13%、対人的判断力8%、自己統制8%、受動的発想力7%、友好的表現力6%、対処的他者受容6%、能動的解読力5%、関係調整

4%であった。柔道塾塾生(図7参照)は、論理的問題提示が最も多い割合を占め23%、次いで自己主張22%、リーダーシップ12%、自己統制10%、対処的他者受容8%、受動的発想力6%、対人的判断力5%、友好的表現力5%、関係調整5%、能動的解決力4%であった。

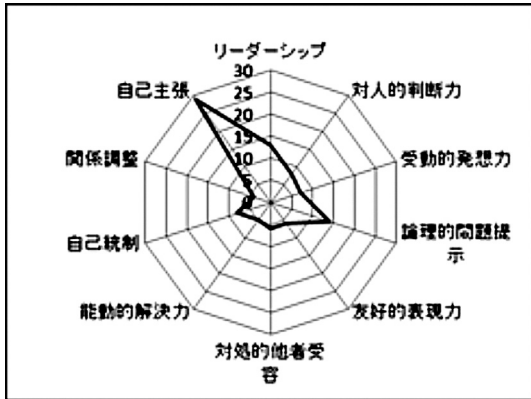


図6 スキル割合(和歌山県TID参加者)

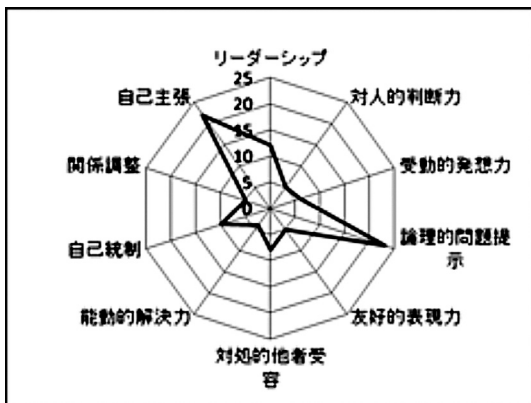


図7 スキル割合(柔道塾塾生)

(3) 発話カテゴリーにおいて個人が占める割合

発話カテゴリー別に、カテゴリー内の発話を100%とし、カテゴリー内における各被験者が占める割合(カテゴリー別被験者発話割合)を表9、10に示した。

和歌山県 TID 参加者(表9参照)のカテゴリー別被験者発話割合をみる。リーダーシップでは被験者 WS1 が32%、対人判断力では被験者 WS1 が24%、受動的発想力では被験者 WS7 が28%、論理的問題提示では被験者 WS7 が30%、友好的表現力で

は被験者 WS6 が41%、対処的他者受容では被験者 WS6 が26%、能動的解決力では被験者 WS4 が25%、自己統制では被験者 WS6 が31%、関係調整では被験者 WS7 が30%、自己主張では WS6 が35%を示し各カテゴリーの中で最も高い割合を示した。

表9 カテゴリー別被験者発話割合(和歌山TID参加者)

メインカテゴリー	WS1	WS2	WS3	WS4	WS5	WS6	WS7
リーダーシップ	32	19	7	20	4	6	12
対人的判断力	24	14	0	21	4	16	21
受動的発想力	12	15	10	18	1	16	28
論理的問題提示	10	18	6	9	6	21	30
友好的表現力	20	8	6	8	7	41	10
対処的他者受容	16	13	7	13	7	26	18
能動的解決力	7	15	5	25	4	22	22
自己統制	9	13	12	8	14	31	13
関係調整	17	12	10	20	3	8	30
自己主張	11	13	5	9	8	35	19

柔道塾塾生(表10参照)のカテゴリー別被験者発話割合をみる。リーダーシップでは被験者 JS2 が33%、対人判断力では被験者 JS7 が32%、受動的発想力では被験者 JS7 が25%、論理的問題提示では被験者 JS2 が29%、友好的表現力では被験者 JS3 が30%、対処的他者受容では被験者 JS2 が24%、能動的解決力では被験者 JS7 が25%、自己統制では被験者 JS5・JS6 が17%、関係調整では被験者 JS7 が22%、自己主張では JS5 が18%を示し各カテゴリーの中で最も高い割合を示した。

表10 カテゴリー別被験者発話割合(柔道塾塾生)

メインカテゴリー	JS1	JS2	JS3	JS4	JS5	JS6	JS7	JS8
リーダーシップ	7	33	9	1	5	10	16	19
対人的判断力	7	26	16	2	2	3	32	12
受動的発想力	12	20	14	5	3	12	25	9
論理的問題提示	9	29	9	2	8	11	13	19
友好的表現力	8	5	30	5	16	10	16	10
対処的他者受容	6	24	7	6	7	10	21	19
能動的解決力	19	23	7	0	5	9	25	12
自己統制	8	13	13	8	17	17	11	13
関係調整	10	23	12	2	14	7	22	10
自己主張	12	17	10	2	18	10	15	16

(4) グループワークにおけるコミュニケーション能力と指導者からの評価の関連性
グループワーク中に発揮されている、各

被験者のコミュニケーション能力（全ての発話を100%としたとき、メイン発話カテゴリーが占める割合（発言率）と指導者からの被験者に対するコミュニケーション能力の評価をもとに、各カテゴリーに有意差があるかを検討した。和歌山県 TID 参加者の発言率と指導者評価において、全てのカテゴリーに対して、有意な相関は見られなかった。（ $P>0.05$ ）（表 11 参照）

表11 発言率と指導者評価の相関（和歌山県TID参加者）

	Peasonの相関係数	有意確率(両側)	P
リーダーシップ	0.59	0.163	
対人的判断力	0.105	0.823	
受動的発想力	-0.425	0.342	
論理的問題提示	-0.154	0.742	
友好的表現力	-0.254	0.582	
対処的他者受容	-0.417	0.352	
能動的解読力	0.541	0.210	
自己統制	-0.254	0.582	
関係調整	0.599	0.155	
自己主張	-0.571	0.18	

柔道塾塾生の発言率と指導者評価において、リーダーシップにのみ有意な正の相関がみられ（ $P<0.05$ ）、比較的1に近い数値を表した。しかし、その他のカテゴリーには、有意な相関は見られなかった。（表 12 参照）

表12 発言率と指導者評価の相関（柔道塾塾生）

	Peasonの相関係数	有意確率(両側)	P
リーダーシップ	0.59	0.163	
対人的判断力	0.105	0.823	
受動的発想力	-0.425	0.342	
論理的問題提示	-0.154	0.742	
友好的表現力	-0.254	0.582	
対処的他者受容	-0.417	0.352	
能動的解読力	0.541	0.210	
自己統制	-0.254	0.582	
関係調整	0.599	0.155	
自己主張	-0.571	0.18	

V. 考察

1. スポーツに必要とされるコミュニケーション能力の構造

スポーツに必要なコミュニケーション能力は、リーダーシップ・対人的判断力・受動的発想力などからなる10因子で構成されている。さらに、その因子間の関連性を導き出した結果、リーダーシップが他の因子に影響を与えているという結果になり、友好的表現力が他の因子から影響を与えられているという結果になった。また、他の因子に影響を与えている因子は社会を構成する要素であり、他の因子から影響を与えられている因子は対人関係を構成する要素であると考えられ、これらの能力を軸にコミュニケーション能力は構成されている。

2. グループワークを簡潔にクリアする為の発話

東京都 TID 参加者と教員免許状取得者の発言の散布をローレンツ曲線にて示した結果、東京都 TID 参加者と比べ、教員免許状取得者の発言散布が少ないという結果になった。この結果から、グループ内の発話機会に隔たりがなく、より多くの人物が発言することによって、簡潔にグループワークを解決することができると考えられる。

本研究では、固定の人数、被験者、環境でのみの分析結果であるが、より簡潔にグループワークを解決するためには、グループの中での役割文化が重要であると考えられる。東京都 TID 参加者は、被験者 TS6 が7つの発話カテゴリーで最も多くの発話割合を占めており、被験者 TS1・TS3・TS7 が1つのみの発話カテゴリーで発話割合の多くを占めているという結果になった。つまり、グループの中で、グループワークにおいて役割分化に隔たりが生じていると思われる。一方、教員免許状取得者は、被験者 MS1 が5つ、MS5 が4つ、MS7 が3つ、MS2 が2つの発話カテゴリーにおいて発話割合の

多くを占めている結果になったことから、ある固定した人物のみが役割を担っているのではなく、ある程度の人数がそれぞれの役割を担っていると推測する。

3. GSEP経験者とGSEP未経験における コミュニケーション能力の比較

和歌山県 TID 参加者(以下 GSEP 経験者)と柔道塾塾生(以下 GSEP 未経験者)において、GSEP 経験者は自己主張が占める割合が多く、次いで論理的問題提示であったのに対し、GSEP 未経験者は論理的問題提示が占める割合が多く次いで自己主張であった。このことから、GSEP を経験していない子ども達は相手の発言に対して質問をする回数が多く自分の考えがまとまってから話をする機会が少ないことが見受けられる。一方、GSEP を経験している子供たちは、自己主張が最も多い割合を占めていることから、問題を推理し自分で考えてから言葉を発していることが考えられる。

両者にカテゴリー別被験者発話割合からみた役割分化にほとんど差はなかった。本研究では、スポーツ経験のない子どもを比較対象としていないことから、いちがいにスポーツの経験の有無がグループワークにおける役割分化に影響を及ぼしているとは言えないが、スポーツ経験のある子どもたちはグループワーク中の役割分化が自然と形成されると推測される。

4. グループワークにおけるコミュニケーション能力と指導者からの評価の関連性

本研究では、グループワークでグループワーク中に発揮されている、各被験者のコミュニケーション能力(全ての発話を100%としたとき、メイン発話カテゴリーが占める割合(発言率)と指導者からの被験者に対するコミュニケーション能力の評価をもとに、各カテゴリーに有意差があるかを検討した。その結果、柔道塾塾生におけるリーダーシップにのみ、有意な正の相関がみ

られたが、その他の能力(発話カテゴリー)には、有意な相関がみられなかった。その要因として、指導者が日ごろ感じている、子どもたちのコミュニケーション能力が“グループワーク”という一定の環境を設定した場合においてその能力に違いがみられると考えられる。指導者が見ている能力は、競技内外において多種多様である。本研究で用いたゲームでのコミュニケーション能力の評価の機会はありませんと思われるため、ゲームでの評価と指導者からの評価に誤差が生じたと考える。

VI. 今後の課題

1. アンケート調査の対象者について

本研究では、スポーツに必要と思われるコミュニケーション能力とその関連性を明らかにするために、体育系大学に通う大学生にアンケート調査を実施した。しかし、被験者のスポーツ経験は様々で、現在、日本代表レベルのトップアスリートや過去にジュニア代表クラスの経験を持つ被験者は少なく、「スポーツを経験してきた・している」というキーワードのみでの被験者の選定であった。今後は、トップレベルのアスリートを対象に調査を実施し、トップアスリートが重要と思っているコミュニケーション能力とその関連性を明らかにする必要がある。

2. グループワークにおける環境の設定

本研究では、簡単なゲームを用いたグループワークを実施する際に、明確な男女比・対象年齢・環境(初対面か日頃から関わりがあるか)を統一することが困難であった。今後は、性差におけるグループ内のコミュニケーション能力の差や年齢間での能力の変容、環境の統一を設定していく必要がある。

3. グループワーク実施における対象者の設定

本研究では、小学生における、能力の差が

ほとんど見られなかった。このことから、対象者の年齢を中学生以上に設定し、GSEPを定期的に継続して経験してきた対象者へ変更する必要がある。

4. コミュニケーション能力評価シートの見直し

本研究では、ゲームにおけるコミュニケーション能力と、指導者から子ども達に対する能力の評価にほとんど有意差は見られなかった。さらに、指導者から子ども達への評価はコミュニケーション能力評価シートを用いてそれぞれのスキルに応じて5段階評価実施したが、3や4などの数値で評価しているものが多かった。今後は、ゲーム内で発揮されている能力を細かく分析するとともに、指導者用の評価シートを5段階評価から10段階に設定し直し、評価項目も同様に見直す必要がある。

VII. 結論

本研究では、スポーツに必要なコミュニケーション能力の構造とその関連性、簡単なゲームを用いたグループワークを簡潔に解決するための能力、GSEPを経験している対象者と未経験の対象者におけるコミュニケーション能力の差を明らかにすることを課題とし、以下の結論を得た。

スポーツに必要なコミュニケーション能力は、リーダーシップ・対人的判断力・受動的発想力・論理的問題提示・友好的表現力・対処的他者受容・能動的解読力・自己統制・関係調整・自己統制の10因子から構成されており、リーダーシップ・能動的解読力・受動的発想力・対人的判断力が他の因子に影響を与え、友好的表現力が他の因子から影響を与えられている。

簡単なゲームを用いたグループワークを簡潔にクリアするためには、グループ内における役割分化とより多くの人話し合いに関わることが重要である。

GSEP経験者は、課題を与えられ解決する為に、自分で考え推理してから発言をする。小学生段階では、GSEPの経験の有無に関わらず、グループ内の役割分化に差は生じない。

文献

- 藤本学(2012) コミュニケーション参考スタイルに注目した小集団における発話行動生起プロセス 実験社会学研究 51(2) : 279-90
- 藤本学・大坊邦夫(2006) 小集団会話における話者の発言傾向を規定する3要素 社会言語学 9(1) : 48-58
- 藤本学・大坊邦夫(2007) パーソナリティ研究第15(3) : 347-361
- 古屋健・音山若穂・懸川武史(2014) 立正大学心理学研究年報(5) : 27-36
- 犬飼己紀子(2003) コミュニケーションのスキルアップをねらったグループワーク・トレーニングの実践 紀要 26 : 11-21
- 金杉高雄(2008) 言語ストラテジーの役割 大成大学大学院紀要 10 : 49-62
- 文部科学省 スポーツ基本法
- 文部科学省 スポーツ基本計画
- 勝田隆・粟木一博・阿部篤志(2011) トップアスリートの育成とスポーツ教育プログラム—地域から世界を見据えて(特集: スポーツによる地域活性化)
- Fujimoto, M., Murayama, A., & Daibo, I. 2004 What ensures a small-group discussion efficient?(1) —The influence of group structure on various aspects of the small-group discussion—28th International Congress of Psychology
- 藤本学・村山綾・大坊郁夫(2004) 集団討議を円滑にするものは何か? (3) : 集団討議における話者役割の特定 電子情報通信学会技術報告, vol.104, No.198, 33, —38